



<第1回>

種を蒔く

久松 英二 氏（世界仏教文化研究センター長、龍谷大学 教授）



【著者紹介】

専門： 東方キリスト教・宗教学

著書・論文： 『14世紀ビザンツの静寂主義』（京都大学学術出版会）、『東方の智ギリシア正教』（講談社）、『聖なるもの』（岩波文庫）、その他。

新型コロナウイルスの感染拡大により、普段行っている行動が著しく制限され、いろいろな不自由を強いられています。学校に行けない不自由、友人や親族に会えない不自由、働くことができない不自由。いろんな意味でやりたいことができない不自由。私たちは、いま、それを経験しています。少しずつ、制限が緩和されてきてはいますが、コロナの第二波、第三波も懸念され、不安と焦燥感からなかなか解放されませんね。そこで、先のことをあれこれ心配することを、いまはひとまず脇に置いて、普段、あまり考えないことを考えて、気持ちをリフレッシュさせましょう。

いきなりですが、「縁起がいい」とか「縁起が悪い」とか、私たちはよく口にします。ここで言う「縁起」は吉凶の前兆という意味で使われていますが、この語は、本来は仏教用語でありまして、「因」（原因）だけではなく「縁」（条件・間接原因）によって物

事が生じることを意味する「因縁生起」を縮めた言い方であります。種が発芽する場合、発芽の「因」は種です。しかし、この場合「因」のみでは発芽という「果」は生じません。発芽するためには、その種を蒔き、水を与え、日光に当てるといったさまざまな条件が必要です。その「さまざまな条件」が「縁」です。物事は「因」のみならず「縁」によって生ずる。仏教はこの「縁」をととても重視しています。そして、もし、あなたが種を蒔くならば、あなたは種にとっての最初の「縁」となります。種を蒔くというあなたの「縁」があって、初めて発芽が可能になるのです。この「縁」を仏教はととても重視しているのです。

ところで、種を蒔くということで、私は、ふとある俳句を思い出しました。

種蒔いて明日さへ知らず遠きをや

医者の肩書を持つ俳人、水原秋櫻子の作です。「種蒔く」という春の季語が入った俳句はたくさんありますが、ほとんどの場合、その種が発芽し、やがて花咲き、実を結ぶことを心待ちにする明るく軽やかな雰囲気が漂っています。が、この句は真逆です。作者自身、この句を「生涯で一番辛かった頃の記念として」残したと述べているほどです。この句は昭和29年の作です。つまり、作者が空襲で東京の家を失い、八王子に仮寓していたときのものです。

作者はいま何かの種を蒔いている。明日という日がどうなるか分からぬという不安な時代に、ましてこれが開花するような遠い先のことなど、どうして期待することができようか。明日さへ知らず遠きをや。もうお先真つ暗、希望もへったくれもないですね。

けれども、取りようによっては、これには「励まし」の句として響くものがあります。作者にその意識はなくとも。たしかに、あの時代は苦しみの時代だった。明るい希望などもてない時代だった。明日、生きているかどうかも知れぬというのに、この種が花咲き、実を結ぶ遠い将来を夢見る境地にどうしてなれようか。そういう気持ち、そういう閉塞感を作者がもっていたのは確かな事実です。

しかし、しかしそれにもかかわらず、作者は種を蒔いているのです。がたっと肩を落としつつも、茫然とため息をつきつつも、それでもとにかく、種を、いま、蒔いているのです。どうせムダだ、と種蒔きを放棄したわけではないのです。ここがポイントです。ここが大事なのです。

将来を嘆くのは仕方ない。状況がそうなのだから仕方ない。しかし、私の手のなかに「種」がある、という事実に目を開くこと。これが大事なのです。「種」、それはあなたとして

花ひらく未来へのポテンシャル、とでも言いましょうか。そういう種は、じつは、だれにも、ある。「明日さへ知らず遠きをや」でも、ある。がくつと肩を落としつつも、とにかく、いま、蒔いてみる。これが大事なのです。なぜなら、「明日」の花、「遠き」実りは、私の思い、にではなく、蒔いた種のなかに、しっかりあるからです。ただし、あなた自身が、種を蒔くという「縁」になってあげるならば、です。どんなにお先真っ暗であっても、どんなに可能性が低く思えても、あなたが「縁」になってあげれば、あなたが、いまやるべき学び、いまやるべき課題に真摯に取り組むという種蒔きを、こつこつと、たまにため息をつきながらも、たまにがっくり力を落とすことがあっても、焦らず慌てず諦めずに続けるならば、種は必ず、あなたに、美しい花を、豊かな「果」を、与えてくれます。必ず、です。

<第2回>

如何に生きるべきか

楠 淳證 氏（龍谷大学 教授）



楠氏

【著者紹介】

専 門： 仏教学（唯識仏教・日本仏教）

著書・論文： 『心要鈔講読』（単著／永田文昌堂／2010）、『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究－仏道篇－』（単著／法蔵館／2019）、『蔵俊撰『仏性論文集』の研究』（編著／法蔵館／2019年）、『日本仏教と論義』（編著／法蔵館／2020）、『修二会－お水取りと花会式－』（編著／法蔵館／2020）、その他。

本日（7月10日）のニュースを見ると、東京や大阪等でコロナ感染者の数がまた増加してきたとの報道が相次いでいます。特に若い方々の感染者増にともない、今後の高齢者への感染が危惧されるということでした。前回の緊急事態宣言の折りには、「大好きなおじいちゃんやおばあちゃんにうつすようなことになると嫌なので学校の再開をまってほしい」と嘆願した高校生がいました。身近な家族を案じる純真な心に、感動をおぼえたものです。

私にも3人の子がいますが、前回の緊急事態宣言の折りには、「誰もがコロナウィルスを持っている可能性があるそうだから、お父さんお母さんにうつすのが心配なので帰らない」といって帰郷を差し控えてくれました。おそらく、私も20歳代であれば、子供たちと同じように行動したのではないかと思います。しかし、私もすでに63歳。父も母もすでに亡くなりました。もし存命であれば、心配でたまらなかったことでしょう。なにしろ、家族を失うことほど、つらいものはないからです。しかし、龍谷大学の建学の精神は浄土真宗の精神でした。阿弥陀如来のご本願を常に聞いてきた私にとって、亡き父も母も今や私と共にある存在となってくれました。今回のコロナ禍に限らず、人は大切な人を次々に失っていきます。広く目を展ひらくと、たくさんの悲しみのすがたが見えてまいります。さて、私たちはどのように生きてらよいのでしょうか。

平成18年（2006）6月3日に、私の父は亡くなりました。肺癌による入院治療から通院治療に切り換えた矢先の5月中頃に、どうやら治療を受けていた病院で肺炎の菌をもらったようでした。苦しそうにしている父を見かねて、病院に連れていったのですが、即入院でした。いつもならすぐに病院にいく父が、その日は嫌がりました。自分で身体の異変に気づいていたのでしょうか。3日ほどして家内から電話があり、「病院の先生がお話をしたいのでお出でいただけませんかとおっしゃってる」とのこと。私は寺院の住職でもありましたから、家族を自坊に残しての単身赴任が13年目となっていました。その日は龍大勤務のために京都にいましたが、知らせを聞いて即座に帰ることにしました。車で2時間半かけて家に戻る途中も、不安でいっぱいでした。急いで病院に駆けつけると、先生

が個室に呼び入れてくださって、レントゲン写真を3枚見せてくださいました。「なんででしょうか？」と問う私に、「これが2日前、これが昨日、そしてこれが今日の写真です。だんだん白くなっているのがわかりますか？」と問われる。「どういうことでしょうか？」と再度尋ねると、「あと一兩日の命です」とおっしゃいました。「どうされますか？」とお尋ねになるので、「連れて帰ります。最期は我が家で看取ってやりたいので・・・」という、「わかりました。すぐに救急車を手配します」といつてくださいました。父はそのとき、集中治療室で酸素ボンベをつけて呼吸している状態でした。私が部屋に入っていくと、ホッとした顔で頷いてくれました。おそらく、私の顔は険しい表情をしていたと思いますが、父はいつもどおりの穏やかな優しい顔で迎えてくれました。「帰るよ」というと、また一つ頷いてくれました。その時の状況を思い返すと、父はもう自分の命の尽きることをわかっていたと思います。

救急車に乗せられて帰った父は、その後、5日間いてくれました。一兩日といわれていたのに5日間も命があったのは、家に帰ってきた安心感からだったのでしょうか。私は父に「もう幾ばくもない」ということを言うことができませんでした。しかし、父はわかっていました。なぜならば、家に帰ってきたのに酸素ボンベで呼吸する状態でした。しかも、大量の酸素が送り込まれているにもかかわらず、それでも息ができなくなる苦痛に襲われることがたびたびあったからです。また、ごく近い親族のみには知らせていましたから、慌ただしく駆けつける親族の姿も見ていました。父はすべてをわかっていたのに、いつもと変わらない穏やかな姿でした。甥のために祝い袋の文字を書くことになりましたが、数文字をやっと書き上げてから「もう書けないな」と一言、静かにいいました。それがすごく印象的でした。

看取っているあいだ中、私は父とごく普通の会話をしていました。亡くなるその日まで、ベッドのそばに布団をひいて、毎日、話しかけました。初めて父の爪も切ってあげました。京都での大学勤務になってしまったばかりに、住職でありながら京都に単身赴任する息子を支え、お寺の大切さ、ご門徒の皆さんとの心の交流の大切さ、こつこつと人生を歩む尊さを教えてくれた父でした。もっとも大きなことは、私が「おみのり」に出会う機縁を与えてくれて、陰に陽に「お念仏の心」を伝えてくれたことでしょうか。最期の時の全く死を恐れず動じない姿、いつもと変わらない穏やかさは、100万の言葉を超えた「無言の説法」であったと受け止めております。

葬儀を勤め、お骨を拾い、7日ごとの中陰法要を勤め、49日の満中陰法要を勤め終え、そしてお骨をお墓に納めました。その間、私は悲しいはずなのに、不思議と涙が出てきま

せんでした。半年がすぎ、その年の12月30日のことでした。例年のごとく本堂のお内陣のおしょうごん 莊嚴（おかざり）をしていた時のこと、ふと気づくと私の顔は涙でびっしょりと濡れていました。毎年、一緒にしていたお莊嚴。「本当におらんようになったんやな」という深いかんがい 感慨がおこると同時に、『阿あ彌み陀だ経きやう』に出てくる「俱く会えい一いつ処しょ」の言葉が頭に浮かびました。「そうだ、また会える世界がある。お念仏を称えるところ側にいてくれる」という思いが次に起こりました。ごく自然の思いでした。それ以来、いまだに喪失感はあるものの、「私が往くまで待っていてくれる」との思いが続いています。

雪山せつせん 童子どうじの無む常じやう偈げとして有名な言葉に、「諸しよ行ぎやうは無む常じやうなり是これ生しやう滅めつの法ぽうなり生も滅も滅し尽じやくめつくす寂滅じやくめつをもって楽となす」というものがあります。その意味は、「この世のものは皆な儚はかなく、現れては滅びるものである。そのような生しやう死じ（生滅）の執しやくとらわれを離れたところに、真実の安らぎ（寂滅）が現れる」ということになるでしょうか。人の命ほど不確かなものはありません。昨日は元気だった人が、もう今日には亡くなっている。そんなことが多々あります。そして、人が亡くなる時には必ず「亡くなっていく人の思い」と「遺のこされる親族の悲しみ」があります。連日に及んだコロナ感染者の数、亡くなられたお方の数、それを見ている内に胸が締めつけられるように思いました。あの方々は、どんな思いでコロナ感染に立ち向かわれたのだろうか。そして、ご家族は……。その一端が志村けんさんや岡江久美子さんのご家族から伝わってまいりました。看取ることもできず、お葬儀さえもしてあげられない。何という病気が広まるのかと暗あん澹たんたる思いが、いまもなお消えずにあります。皆さんも、おそらくそうだろうと思います。私は父を看取ることができたのに、また葬儀も心を込めてすることができたのに、それができない方々がいらっしやる。何と悲しくもつらい病気が広まってしまったのかと、いまなお心の落ち着きどころがありません。

ところが、人は自分の死をなかなか見つめることができません。どこかで自分は大丈夫と思っています。かつて、お釈迦さまは次のようにお弟子たちにおっしゃいました。「ここに一頭だての馬車が四台ある。一台目の馬は御者が走り出させようと思ったら気配に気づいて走り出してくれる。二台目の馬は御者が管で打つと走り出してくれる。三台目の馬は管で打っても動かないので刀で刺すと気づいて走り出してくれる。四台目の馬は、御者が管で打っても刀で刺しても走り出さない。実は、これが多くの人々の有り方なのだ。一頭目の馬は誰に教えられるでもなく世の無常を感じて道を求めていく人、二頭目の馬は人の死を見て我がことだと気づき道を求めていく人、三頭目の馬は我が家族の死を見てようやく我がことだと思う人、四頭目の馬は我が家族が亡くなっても人ごとに思って我が命を見つ

めることができない人だ」と。さて、私たちは何頭目の馬でしょうか。

コロナ感染の拡大にともなって自粛が励行され、さまざまなことが起こりました。大切な年間行事の多くが中止され、飲食店等の諸店舗や博物館・美術館等も休業をやむなくされ、大学の講義もリモートになりました。冒頭でもお話した「家族に感染させたくないから授業の再開を猶予してほしい」と嘆願した高校生のことや、「コロナ禍で困っていらっしゃる方々に」と多額の寄付をなされたお方のことも、まだ記憶に新しいところです。その一方で、反自粛的行動も見られました。なぜでしょう。それは、私たちの持つ^{ぼんのう}煩惱に原因があるからです。人には誰にでも^が我癡^ちという「私ということに根幹的に暗い心」がありますので、「私^{わたし}」という^が我見^{げん}を起こしてしまいます。そのため同時に、我が身に愛着する^が我愛^{あい}の心や我が身が一番優れていると驕り高ぶる^が我慢^{まん}の心まで引き起こしてしまいます。だから、「私は感染しない」という何の根拠もない思いを持ったり、「したいことをして何が悪い」と思ったりしてしまうのです。我癡は^ち癡という煩惱から起こり、我見は^{あつげん}悪見という煩惱から起こり、我愛は^{とん}貪という煩惱から起こり、我慢は^{まん}慢という煩惱から起こります。今、私たちは「このような煩惱に振り回されて生きていてよいのか」と、あらためて問われているのです。さて、私たちはどのように生きたらよいのでしょうか。

私は今、龍谷大学仏教学会の会長でもあります。4月の時点で運営にあたる学生（院生）の安全を考えて、すべての学会活動を休止状態にしました。かなり早期で下した判断でしたが、振り返ってみると的確な判断であったなと思っています。大学が社会の動向を見て基準を変更し、レベル2にしたのを受けて、学会活動の一部再開はありえるか否かについて、私より若い先生（学会誌担当編集委員）にご意見を求めました。すると、以下のような答えが返ってきました。「学会誌を出さなくても人は死にませんが、学会活動の再開によって罹患者が出て重症化した場合、院生が死ぬことになるから駄目です」と。この答えを聞いて私は安心しました。業務的にもならず、自己中心的にもならず、全体を見る確かな目をもっている人が龍谷大学には育ってきている。それが喜びでした。学生の感染を防ぐことができれば、ご家族の感染リスクも減らすことができます。皆が他者のために、三密を防ぐ努力をすることが大切なのです。そのことを教えてくれているのが、建学の精神にほかなりません。

龍谷大学の建学の精神は、自己中心的になりがちな私たちの有り方を変えていく力を持っています。人の悲しみを見つめて寄り添う人を育てていく力を持っています。そして、人の悲しみを見つめ、思いやり寄り添うことこそが、今の私たちにできることです。折しも、大雨による水害が九州各地や岐阜県等で再び起こりました。私の地方も平成16年に台

風の被害を受けましたが、そのとき私は 2 週間、大学を休んで奉仕作業をいたしました。だから、水害を受けておられる方々の苦悩を私は見えています。しかし、直接に見聞きしなくとも、建学の精神を心の耳で聞いた人は、人の悲しみを想像する力を与えられ、思いやり悲しむ心を育てることができます。今回のコロナ禍、および水害を前にして、どうか家族や友人を大切に思い、悲しみの中にある多くの人たちに目を向けることの出来る心を持ち、行動していただきたいものと念願しています。

合 掌

<第 3 回>

誰にも言いようのない悩みをかかえたとき

鍋島 直樹 氏（龍谷大学 教授）



鍋島氏

【著者紹介】

専 門： 真宗学、親鸞の生死観と救済観、ビハーラ活動論

著書・論文： 『死別の悲しみと生きる』（本願寺出版社）、『アジャセ王の救い王舎城悲劇の深層』（方丈堂出版）、"Buddhism、 History of Science and Religion"、Naoki NABESHIMA、 pp、81-87、 J. Wentzel Vrede van Huyssteen、 ed. Encyclopedia of Science and Religion、 Macmillan Reference、 volume 1 and 2、 New York、 June 2003

新型コロナウイルス（COVID-19）感染、または災害や思わぬ事故や病気に遭われ、困難な生活をなさっている方々にお見舞い申し上げます。

どれだけ愛しくても何もできない無力さで悲しくなります。しかし、どんな闇にも必ず光がさしてきます。悲しいとき、仏さまも悲しみ涙を流し幸せを願っておられます。

未知のウイルスに対し治療と感染防止に献身してくださっている医療福祉・行政の方々、日々の生活を支え働いてくださっている方々に感謝申し上げます。

学校の先生や学生は、オンライン授業を通して懸命に学びあっています。言葉の力を信じ、画面や電話を介して、笑顔や声で心を解きほぐしあっています。しかし実際には、パソコンの画面を見つづけるために、目や肩や腰が疲れます。自分の部屋に閉じこもり、孤立しています。面会できない状況で、どうすれば心を通わせることができるのでしょうか。たとえどんなに離れていても、寂しくても、掌を合わせて大切なあなたを想っています。

誰にも言いようのない悩みをかかえたとき、人は何を求めるのでしょうか。

苦しんでいる人が求めているのは、自分の悩みを分析され、立派な答えをもらうことではありません。ライフリンク自殺対策支援センターや東京自殺防止センターで相談員をしている安楽寺の藤澤克己さんは、「相手がうちあける言葉の意味に探りを入れたり、安易に「大丈夫です」と空手形をだしたりするのではなく、ただ寄り添うことが大切です」とおっしゃっています。

童謡詩人の金子みすゞさんの作品に、次のような詩があります。

こだまでしょうか

金子みすゞ

「あすぼう」っていうと、

「あすぼう」っていう。

「ばか」っていうと、

「ばか」っていう。

「もうあすばない」っていうと、

「あすばない」っていう。

そうして、あとで、

さみしくなって、

「ごめんね」っていうと、

「ごめんね」っていう。



こだまでしょうか、いいえ、だれでも。

(『金子みすゞ童謡全集』第6巻、149頁、ジュラ出版局)

この詩は何を言おうとしているのでしょうか。自分の気持ちにこだましてくれる人がいるときに、わが身を素直にふりかえり、相手にも優しくなれることを、金子みすゞさんはこの詩で表現しようとしたのでしょうか。うれしい時だけではなく、苦しく悲しい時に、誰かと深くこだましあう、それが生きる力になるということでしょう。

それはまた、私の称えるお念仏が、仏さまの私を心配する声となり、こだまして聞こえてくる体験であります。

甲斐和里子さんの詩に、こう記されています。

泣きながら 御戸^{みと}を開けば 御仏^{みほとけ}は
たゞうち笑^えみてわれを見そなわす

(甲斐和里子著『草かご』256頁、百華苑)

ただお念仏を称え、仏さまを呼ぶ私の声が、仏さまの呼び声となって聞こえたのです。何も言えなくても、泣いている彼女を、お仏壇の仏さまが静かに微笑んで見守ってくれたのでしょうか。このように心に悩みをかかえている時には、誰かが深く聞いてくれること、深くこだましてくれることが最も求められることではないでしょうか。

強そうに頑張ってはいても、誰しも弱さや愚かさをもっています。がむしゃらに貪り、修羅のような自己に気づいて涙することがあります。

罪の重さに押しつぶされ、謝る言葉さえ失うこともあります。

誰からも愛されずに、孤独で、いっそのこと死んでしまいたいこともあります。

大切なものを喪失したとき、虚しさが広がります。

生きることが苦しいのは、何が本当に大切であるかに気づいたからでしょう。

私たちの社会は、死にたいと思うほど真摯に生きている人たちの苦しみに気づき、自死を通して知る人間のまことの愛情に学ぶ必要があるでしょう。

人は誰しも弱い存在です。

罪を感じて、慚愧するところに、人として生きる道があります。

涙は、深い愛情に気づいた証です。

自らの重い苦しみを知るところに、大悲が満ち満ちてきます。



最も深いあわれみを「大悲」と表現します。

大いなる悲しみこそが、最も深い愛情であるということでしょう。

無明長夜の灯炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障おもしとなげかざれ

(『正像末和讃』(36) 『聖典全書』2巻 486頁)

「如来の本願が、暗闇を照らすかがり火であり、自分の智慧の眼ではなにも見えないと悲しまなくていい。如来の本願が、苦しみの大海に沈む人を救う船であるから、みずからの罪が重くなげかなくてよい」という内容です。

まどいの眼には見えなくても、光は私を常に照らしています。

どれほど深い罪に沈んでいても、大悲の船が私を乗せてくれます。

あらゆるものが大地に排除されることなく支えられているように、罪や悲しみをいたままに仏さまに願われています。

どうか自分をいたわってください。

あなたは、誰と比べる必要もないかけがえのない明かりです。

あなたの苦しみを誰かに打ち明けて、一緒に解決する道を探すことができれば、きっと明日が見えてくるでしょう。

たとえ世間すべてから見捨てられても、仏さまがあなたのそばにいます。

まことの愛情は、どんなに離れていても、目には見えなくても、今この心に満ちています。輝く大切なものは、あなたの中にきっと生きています。

参考文献

竹本了悟・野呂靖「仏教者による自死対策: 国際的な課題の共有に向けて」、『2017年度研究報告書』、龍谷大学アジア仏教文化研究センター、2018

矢崎節夫著『童謡詩人金子みすゞの生涯』、JULA 出版局、1993

鍋島直樹『自死をみつめて死と大いなる慈悲』、本願寺出版社、2009



<第4回>

知ることは変わること

嵩 満也 氏 (龍谷大学 教授)



嵩氏

【著者紹介】

専 門： 真宗学・宗教学

著書・論文： 主著：『国際社会と日本仏教』（編著丸善出版 2020 年）、『日本仏教と西洋世界』（編著法蔵館 2020 年）、『変貌と伝統の現代インド』（編著法蔵館 2018 年）、“Japanese Buddhist Activities in South Asia Seen in the Magazine of the Kaigai-bukkyo-jijo（『海外仏教事情』1887-1893）（単著『真宗学』141・142号 2020）など。

新型コロナウイルスが猛威をふるう中で、いま私たちはこれまで当たり前と思っていた自分の生活基盤が如何に不安定なものの上に成り立っていたのかという事実を目の当たりにしています。それと同時に、自分たちの生活がどれほどさまざまな「つながり」の中で営まれていたのかということを実感しています。そのことが、世界全体の先行きに対する大きな不安を生み出しているのはまちがいありません。

仏教をふくめ、宗教について研究する私たちは、このような状況の中で、世界に対して

どのような貢献をすることができるのでしょうか。そのことに関わって、すでいくつかの国際機関や宗教組織から、宗教者が果たすべき役割についての声明がこれまでに出版されています。

たとえば、4月7日にユニセフ(国連児童基金)と世界宗教者平和会議は共同で、「新型コロナウイルスに立ち向かうための諸宗教の行動イニシアチブ」(Multi-Religious Faith-in-Action COVID-19 Initiative: <https://www.unicef.org/press-releases/launch-global-multi-religious-faith-act-on-covid-19-initiative>)という提言を出版しました。この提言では、諸宗教の指導者たちが新型コロナウイルスに立ち向かうために、宗教のちがいを越えて連帯しつつ、子どもたちやコミュニティが直面する問題への認識を高め、社会的弱者の声を聞き取り、さらには人々の差別や偏見の解消と心のケアに取り組むことが求められています。宗教者に対して、感染拡大防止に努めるだけでなく、その宗教的なネットワークを活用して、積極的に社会的弱者の声を吸収することが要請されているのです。

また、5月12日に国連で開かれた会議 (High Level Meeting on the Role of Religious Leaders in Addressing the Multiple Challenges of COVID19: <https://www.unaoc.org/2020/05/remarks-high-level-meeting-on-the-role-of-religious-leaders-in-addressing-the-multiple-challenges-of-covid19/>) で、グテーレス国連事務総長は、宗教指導者たちがウイルスとの戦いでもっと大きな役割を果たすように要請しました。フェイクニュースや暴力、外国人敵視や差別、女性への暴力に対して、宗教指導者たちが非難の声を上げるように訴えました。宗教者が社会的弱者の声となって行動することが求められているのです。

一方、仏教教団も早くからメッセージを発信しています。たとえば、アメリカの浄土真宗教団であるアメリカ仏教教団 (Buddhist Churches of America) は、3月29日に、マービン原田総長が、信徒の不安に対してメッセージを発信しています。その中で原田総長は、信徒の心理的な不安を受け止めつつ、親鸞聖人の念仏の教えが実生活の中でどのような意味を持つものかについて伝えています。信仰が持つ力こそ、人間の根本的な不安に対抗する拠り所を提供するというのです。(https://www.buddhistchurchesofamerica.org/wp-content/uploads/2020_03_29_message_covid19.pdf)

また西本願寺も、4月14日に、石上智康総長が「新型コロナウイルス感染症に関する念仏者としての声明」を出しています。この声明では、感染症の危険性や対処法を正しく理解し実行することの大切さと、差別や偏見が拡がらないよう、一人ひとりがお互いを思いやり、注意深く行動することを求めています。また、人と人との「つながり」の大切さに気づくとともに、誰もが安心して生活できる社会を取りもどすことができるよう、それぞ

れが精いっぱいにつとめを果たすように呼びかけています。念仏は現実から逃避する教えではなく、自己と現実を深く見つめることであり、そこに生きる意味と勇気を与えられることなのです。(https://www.hongwanji.or.jp/news/cat5/000509.html)

さらに、International Network of Engaged Buddhism (INEB: <http://inebnetwork.org/>)という、タイのバンコクに本部がある仏教組織があります。この組織では、アジアを中心に活動をしているエンゲージド・ブuddhistたちが、宗派や出家・在家の区別を越えて国際的に連帯し、平和運動や環境運動などの解決に取り組むとともに、アジア各地の若い仏教徒たちの社会活動を支援しています。INEBは、この6月12日に、ポスト・コロナ、すなわちコロナ収束後を見通した提言(Enlightenment-Crisis a Vision for a Post-COVID19 World: <http://inebnetwork.org/enlightening-crisis-a-vision-for-a-post-covid-19-world/>)を出しています。この提言では、今回の新型コロナウイルスの猛威が明らかにした現代世界のさまざまな矛盾と取り組むべき課題が取り上げられています。具体的には、「仏法経済(Dharmic Economics)」「持続可能なつながり(Sustainable Interbeing)」「文化多様性と共生(Cultural Diversity and Co-existence)」「善き統治(Good Governance)」といった視点から、ポスト・コロナの世界において取り組むべき重要な課題が明らかにされています。今回の新型コロナが明らかにした現代世界が内包している問題を、仏教の立場から多面的に分析しています。

いずれも、いま私たち研究者に何ができるかということを考える上で、とても参考になるものです。是非、皆さんにも一度目を通して頂きたい声明です。それぞれの立ち位置はたとえ異なっても、このような提言に対し一人の研究者として誠実に耳を傾け、その意義を深く理解し、実際に行動していくことがいま私たちに求められているのです。仏教を研究する者として出来ること、またやるべきことがあるはずです。そのような面での研究が、今後この研究センターで展開されることを期待したいと思います。私自身、「知ることとは変わることであり、変わることはそのように生きることである。」と語られた、学生時代の恩師の言葉の正しさと重さを、いま改めて感じているところです。

*次のホーム・ページでは、1月末以来発信された新型コロナに関する仏教関連の国際ニュースを時系列的に紹介しています。(https://www.buddhistdoor.net/coronavirus-roundup)



<第5回>

「いろは歌」雑感

三谷 真澄 氏 (龍谷大学 教授)



三谷氏

【著者紹介】

専 門： 仏教文化学、古写本学

著書・論文： 『カント哲学と浄土真宗—三谷真来顕彰録』永田文昌堂、2000『大谷光瑞のトルコでの動向—「仏教」と「農業」のあいだ』(龍谷大学国際社会文化研究所研究成果報告書：共編)、2016『「世界」へのまなざし～最古の世界地図から南方熊楠・大谷光瑞へ』(龍谷大学アジア仏教文化研究センター文化講演会シリーズ2) 法蔵館、2017『大谷光瑞の構想と居住空間』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書14) 法蔵館、2020『古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター2019年度研究成果報告書』、2020

「いろはにほへとちりぬるを・・・」ではじまる「いろは歌」。日本語版完全パングラムであるとともに、仏教の「無常偈（雪山偈）」や「三法印」とも関連する、まさに、日本の言語文化の粋と言って良い作品です。

担当している「仏教の思想 A」では、毎年、受講生全員が暗唱できるようになるよう努力しています。今年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、全授業がオンラインとなったため、種々方法を考えましたが、一方向型で使用しているソフトでは難しいと判断し、別の方法をとりました。アンケートをとったところ、62名中、「知っている」と回答した受講生は、91.9%でした。一方、「全て言える」と回答したのは27.4%でしたが、歴史的仮名遣いを含む47文字を重複することのない形で、完全解答できたのは4名と6%程度でした。学部は複数にまたがるものの、例年ほぼ同程度で推移しています。以前、担当させていただいたRECの「仏教入門」の受講生が、ほぼ100%解答できる状況から、世代間格差が広がっていると思います。

最古の国語辞典とされる平安時代の『色葉字類抄』や、室町時代の『節用集』（江戸期まで改編）など、江戸時代から明治時代までは、辞書配列は「いろは順」が当たり前でした。明治になって、学校教育の場で、『小学教授書』（文部省編1871（明治6）年5月刊）や、1886（明治19）年に、尋常小科1年の前期に使用することを前提に編集された教科書『読書（よみかき）入門』で、五十音が採用されました。そして、1889（明治22）～1891（明治24）年にかけて出版された『言海』（大槻文彦編）で、辞書配列が五十音順へと改められました。

日本人にとって、手習い歌であり、習字の手本でもあった「いろは歌」は、物事の順序を示す「いろは」や、初歩や入門的なものを示す「ooのイロハ」とか、江戸時代の火消しの「いろは組」など、多くの場面で用いられてきた歴史があります。一方で、この歌の中に流れている無常・無我という真理や、涅槃を志向するあり方は、この歌の詳細は知らずとも、日本人に仏教的情操を涵養してきたのではないのでしょうか。

龍谷大学の元教授であられる相馬一意先生が、「いろは歌」の現代語訳をしておられます。素晴らしい翻訳なので、引用して紹介します。

妙なる香りを発して咲き誇る花ではありますが、これもいずれは散りうせねばなりません。ものはすべて、かように無常なるものであります。いったい何が無限の存在を保ち得ましようぞ。いったい誰が永遠の栄華を続け得ましようぞ。生滅変化する無常の世界を、今日ここに越え過ぎることができたからには、

表面の華やかさに惑ってありもしないものを夢見、刹那でしかない世界を常と酔いしれる、こんなことはもはや決してありはしないでしょう。

(相馬一意『仏教がわかる本』伝道新書 13、教育新潮社、1992、pp.138-139)

英語版パングラムとして、よく知られているものは、*The quick brown fox jumps over the lazy dog.* (すばしっこい茶色の狐はのろまな犬を飛び越える。33 字) や、*Zing! Vext cwm fly jabs Kurd qoph.* (ひゅん!怒ったクームのハエがクルド人のコーフを突き刺す。26 字) という文があります。ドイツ語でも、“*Fix, Schwyz!*” *quäkt Jürgen blöd vom Paß.* (ウムラウト付文字、ß も使用した 30 字の完全パングラム) という文があるようですが、文字の特性や母音の数の点で、かなりの困難があり、内容の深さでは「いろは歌」に軍配が上がります。

中国語では文字の数が膨大（『大漢和辞典』見出し 49、964 番）で、1,000 の漢字が重複なく歌として成立している「千字文」の存在が快挙であると思います。

今年 3 月、父の死に遭遇しました。3 年半の間、週 3 日、人工透析に自分で自家用車を運転して病院に通い、法事や葬儀などの仏参をつとめてくれていました。息を引き取る数日前まで法務にいそしんでいたのです。私が住職に就任して 1 年も経たないうちに、3 月 9 日（旧暦 2 月 15 日）、奇しくも釈尊の涅槃と同じ日に、この世の無常を身を以て示してくれました。

実は、参り合いの組内寺院の前住職が同日に逝去され、11 か寺の組内は大わらわとなりました。夜に亡くなった父の方は、一日遅らせて通夜・葬儀をおこなうことになり、その結果、9 か寺の住職が連日葬儀に出勤しただけでなく、私は、そちらの寺院の通夜と葬儀に導師として出勤し、前日まで遺族であった住職がこちらの通夜と葬儀で導師を勤められるという前代未聞の事態となりました。およそ未曾有の出来事でしょうし、空前絶後、おそらくこれからも例のないことになるでしょう。まさに、無常の世そのままに、誰もが予期しないことが起こったのです。

この一連の出来事は、「病」、そして「死」を身近なものとして受け止め、無常なる世を生きていることを自覚せざるを得ないこと、COVID-19 禍の中、人間として生まれた意味を深く考えよという催促であったと思います。長く教育者として生きた父の、私たち家族への最後の教育であったと思います。

「いろは歌」に込められた、無常を超えた境地を志向するあり方は、時空を超えて、苦悩の中に生きる私たちへのメッセージだと思います。怠ることなく日々精進し、与えられた命を、日々精一杯生き抜いていきたいと思います。



いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを
わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ
うゑのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて
あさきゆめみし ゑひもせす 浅き夢見じ 酔ひもせず

<第6回>

それでも、前を向いて

日高 悠登 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員）



日高氏

【著者紹介】

専 門： 宗教学死生学臨床哲学

コロナ禍の下で生活をしていると、かつて読んだ村上龍の小説『ヒュウガ・ウイルス：五分後の世界 II』（幻冬舎文庫 1998）を思い起こさせられます。本作には、謎の奇病に挑む主人公たちが、幾度もの危機的状況乗り越えていく姿が描かれています。

本作に限らず、数多くの作品がいかにして危機的状況乗り越えていくかを描いてきましたが、現実の私たちに対して遠からず投げかけをしていたと思われま。この数ヶ月の間で、創作世界に近い事態がコロナ禍という現実として立ちはだかり、社会的混乱は底知

れぬものとなりました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と闘病している方々のみならず、未感染の方々も、日常生活に潜む感染への危険に怯えなければならない状況が依然として続いています。

テレワーク、オンライン講義による感染拡大防止への工夫はされてきましたが、勉学と娯楽に励む皆様であれば、数ヶ月以上にわたって精神的にも身体的にも耐えなければならない状況が続き、その満ち溢れた若さを発散する場に事欠いているものと思われます。ですが、忍耐には限界があり、ぶつけようのない怒り、そして閉塞感を常に感じていることでしょう。



実は、私も生活の中でコロナ禍の影響を受けたと実感する出来事がありました。私の祖父母は東北在住で、祖母は数年前に亡くなりました。この時は残存放射能の影響を懸念して、両親のみが祖母に会いに行きました。そして、今年 7 月には祖父が亡くなりました。ちょうど、新型コロナウイルスの感染者数が増加した時期であったことから、私の家族は誰も葬儀に出席できませんでした。いずれの災害の影響によって、祖父母の元に駆けつけられなかったのは残念でありませんでしたが、二人ともあまり苦しまずに息を引き取れたという報せが孫としての何よりの救いでした。

ここで思い出されたのが仏陀の言葉です。彼は「八苦」という、人間の苦しみの一つに「愛別離苦」（愛する者と別れなければならない苦しみ）があることを説きました。今回のコロナ禍における祖父の死別により、その苦をあらためて実感することになりました。時間は決して巻き戻すことはありませんが、進んでいく時間の中で生きていく私は、時に生前の祖父母との思い出を振り返りながら、これからの時間のどこかで二人にまた会えることを日々楽しみに過ごそうと考えています。そして、コロナ禍終息の折には、必ず祖父母の位牌と墓前に手を合わせたいと望みながら、今を耐え忍んでいるところです。

実際、新型コロナウイルス感染症により大切な方を亡くした方々の悲しみは図り知れないものです。また、私と同じ状況にあって肉親や親族との別れに立ち会えなかった方々も、たくさんいらっしゃるのではないかと心に痛みます。存在を失った悲しみの深さも、悲しみと向き合う距離も、心を癒せる時間も人それぞれでしょう。ですから、これまで享受してきた平穏の日々に、いつかたどり着けるよう願う次第です。一方で、これ以上悲しむ方々と犠牲者を増やさないようにする為にも、自分たちでできる範囲での感染拡大防止に努めていく他ありません。



ところで、コロナ禍の影響を受けたと実感することは、もう一つあります。それは思考の新規開拓です。普段通りの生活の中で、無意識の内に思考を深めていることはよくあるのですが、今回のような思いがけない状況により開拓されることもあるようです。自粛生活で人と会うことが減少したことにより自己を見つめ直し、思考する時間が十分確保できたことが、ある意味、不幸中の幸いだったと言えます。仕事では何かと思考しなければならないわけですが、在宅勤務によりさらに時間が確保されて成果が現れてきました。

そもそも学生時代では、自室にひきこもる研究生活を送らざるをえなかったのも、当時を追体験しているような気分でもあります。それだけでなく家事全般、情報環境整備、健康維持などに対して視野をより広げるきっかけにもなったので、こちらの方も新規開拓でした。気づけなかったことに、気づけるということ。まさしく、置かれた状況を冷静に見極めていくことの大切さをあらためて実感しています。視点を変えて物事を見る機会が得られたという意味では、逆境こそ思考を蓄えられる機会でもあるようです。



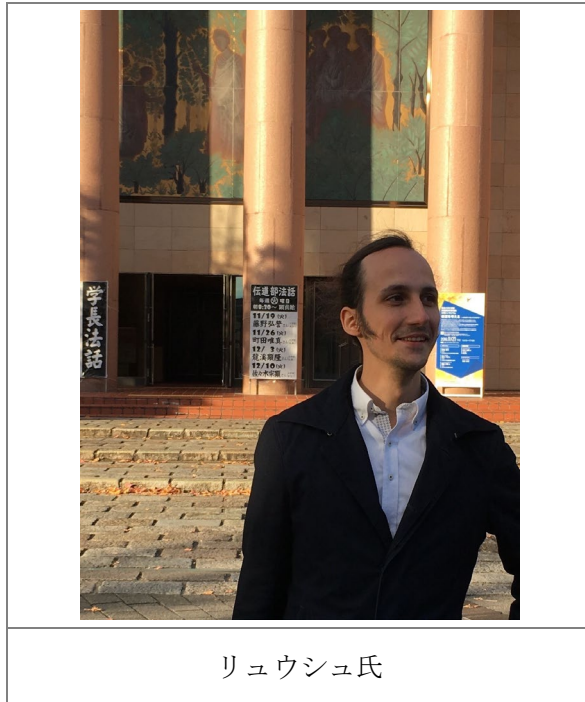
最後に、このエッセイを読んでいる皆様が安心して日々を送れるよう遠からず見守ると共に、一刻も早いコロナ禍の終息を願っています。



<第7回>

仏法が教える「with コロナ社会」の積極性

リュウシュ マルクス 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員）



【著者紹介】

専 門： 日本仏教、宗教空間、聖人伝

著書・論文： 『Argumente des Heiligen: Rhetorische Mittel und narrative Strukturen in Hagiographien am Beispiel des japanischen Mönchs Shinran（聖なるものの論弁：聖人伝における修辞法的手段と物語論的構造、日本僧侶親鸞を事例に）』（Iudicium、2019）、「The structure of revelation in Shinran's teachings: Myōgō 名号 and the aesthetic meaning of Amida's name」（HŌRIN19、2018）、「親鸞とハイデガーとの『対話』—『自然』の概念を巡って—」（『人文學報』110、2017）その他。

今年の初めにはまだ半分うわさじみて聞こえた「コロナ」は、3・4月にかけて活発になり、緊急事態宣言という状態までにいたりました。あるドイツのニュースキャスターが言ったのは、今の世界が常に、戦争・旱魃・金融危機のような多数の危機と当面しているが、今回のコロナウィルスの流行の特徴は全世界・全階級までに影響を与えるところにある、

ということでした。不安や孤独などマイナスしか感じられない状況にあることは間違いありませんが、こうした中でいかに生きるかということが、私たちの新しい課題になりました。その中、比較的早い段階で「with コロナ社会」というスローガンが宣言されました。私にとっては、その言葉がとても印象的で、非常に建設的な表現だと思いました。

その中に含まれている大事なメッセージは二つあると思います。1点目は、コロナを認める、ということです。単純に聞こえるかもしれませんが、世界政治での発言を見ると意外と難しい点のような気がします。2点目は、コロナによる制限のみに注目するのではなく、コロナを前提として、そこから必要に応じて新たな生活を考えようということです。本エッセーでは、仏法が私に今まで教えてくれたことと対照し、その2点について考えたいと思います。

(1) コロナを自覚する態度

仏教の最終的な目標は、自我を超えた境地にいたる（涅槃に入る）ことまたは全ての生物のために生きること（慈悲の実現）だと思います。宗派によって、その中の方法などは違いますが、その目標を達成するための条件がまず自分と自分がいる境遇をしっかりと見つめることです。仏教はそうした意味で自己意識と自己責任を要求する宗教だと思います。そこで、コロナは非常に危険な事実だと自覚した上で、自分は他の人と比べればどのような立場にいるかを考えなければならないとよく思いました。ニュースを見れば、自分の悩みと比較にもならない不幸がどれだけ世の中に多いかは予想することができます。医療機関が対応しきれなくなった国や、家族を失ってきちんと別れを告げることができない人など、事実としてコロナで苦しんでいる人が多くいます。仏教が求める自我の追求は、自我の問題を大きくするためではなく、逆に自分の些細さに気づき、そしてそれは謙遜に繋がると思います。しかし、本当に苦しい人は、それを苦しさとして受け止めなければなりません。

(2) コロナを積極的に生きる態度

では、自分の立場を考え直し、苦しいことを否定せずに、自我から生まれたものを放棄した上で、いかに前向きに生きればいいのかのでしょうか。在宅勤務の初期に、私がいる部門の部門長に大変励まされた言葉がありました。それは、コロナになって心配の多い時期になったかもしれませんが、別の形でより活発な研究活動も可能ではないか、ということでした。その言葉の根拠にあったのは、コロナが1・2ヶ月内で終息しないはずだという(1)で話したような“自覚”でした。ただ、それで終わるのではなく、コロナだからこそこできることがあると強調してくださいました。そのため、今までできなかったことや疎かにしてし

まったことがあるので、まずはそれに励んで、新たな成果を出すように頑張ろうと思いました。そこで、最澄の「一隅を照らす」という有名な言葉を思い出しますが、この言葉は今現在の自分を一生懸命生きるべきだと教えてくれます。自分に課せられている仕事で全力を尽くせば、そこから周りにも光が放たれていきます。そして、私も常に「他隅」からの光を浴びることで元気を頂戴しています。私はワクチンを作る能力がありませんし、寄付できるほど十分な財産もありません。しかし、在宅中の業務やオンライン授業といった意味で貢献できることが多くあります。一つ一つは些細なことですが、それに励む甲斐が必ずあります。そうした自分なりの課題は、誰でも持つと思います。

そして、「with コロナ」という表現に含まれているように、コロナにおける生活の時機相応アップデートが要求されているのではないのでしょうか。コロナは、必ずしも転換期だと重く受け止める必要がありません。歴史を振り返ってみれば、疫病は逆に定期的に起こるものだということが分かります。ただ、その状況をきっかけに、コロナが終息した後にも適用するような新たなことと既存のことの改善を考えなければなりません。いわば、どのような混合形式が可能なのかを考える必要があると思います。今解決するしかない問題を抱えているような、実際に困っている人も多くいます。しかし、デメリットだけに注目すれば、何の成果も生まれてきません。困っている人は、それを自分だけで解決しようとしないで、周りにいる人と話し合うことができます。また、周りにいる人たちは、協力し合う「社会」を創造する責任があります。

ただ、いくらコロナ社会を積極的に生きようと思っても、限界があります。物質的な問題もあれば、自分の非合理性による悩みもあります。私にとって親鸞の教えの一つの魅力は、凡夫^{にんげん}が孤独に陥ったり、自分の勝手な思いに浮かれたり生活を送るということを否定しないことです。親鸞の教えは、それを勧誘するわけではありませんが、凡夫^{にんげん}がいくら頑張っても挫折するときがあると許してくれる優しい面があります。我々は、その教えに学んで、悲しむときに悲しみ、ただそれに溺れることなく、終息という絶対的に確保されている救いに向けて、自分なりの貢献を果たしながら、互いに助け合う「with コロナ社会」を新たに創造していきましょう。



<第8回>

他者への思い

道元 徹心 氏 (龍谷大学 教授)



道元氏

【著者紹介】

専 門： 仏教学 (天台学・叡山浄土教・日本仏教)

著書・論文： 『日本仏教の展開とその造形』(編著、法蔵館、2020) 『比叡山の仏教と植生』
(編著、法蔵館、2020) その他

新型コロナウイルスの感染拡大により、9月4日の時点で世界の感染者数が2603万人を超えました。国内の感染者数も合計7万人を超え、細心の注意のもと生活していてもいつ感染するかもしれない深刻な状態です。こうした中、地域やコミュニティーで感染者が出たとなると、彼らを誹謗中傷する言葉がSNSなど通信媒体を通じて流れ、感染者やその家族にまで根拠のない噂話が広まり差別扱いする事象を耳にします。人間がウイルスと闘うと同時に人間同士が闘う構図が生まれているのです。

過去にもスペイン風邪(1918-)のような感染症の流行は幾度となく人々を襲ってきましたが、これほど急激な感染拡大や通信媒体による感染者への中傷は先進技術がもたらした負の側面といえるでしょう。いずれワクチンが開発されこの状態が収束されたとし

でも、コロナに限らず他者を安易に攻撃する言動が許される社会であってはならないと強く感じます。

霊長類学研究者の山極寿一博士は次のように述べています。「ゴリラやチンパンジーだと、どちらか一方に加勢するよりもトラブルそのものを抑えようとする。ゴリラは攻撃した方をいさめるし、当事者より小さいゴリラが介入することもある。チンパンジーもよくけんかに割りこんで仲裁するし、傷ついた者を抱いてなぐさめる。これはゴリラが体の大きさにとらわれずに、互いに対等でありたいという気持ちを、チンパンジーはトラブルが広がることをおそれる気持ちを強くもっているからだ。その基本的な感情がもとになって彼らの社会はつくられている。・・・中略・・・昨今の生活状況の変化は見られる機会や意味を減らし、感情に重きを置いた行為を選択させているように見える。・・・中略・・・インターネットのおかげで自由に情報にアクセスできるので、だれにも相談せずに知識を得たり判断できるようになった。他者を否定することも肯定することも、自分ひとりの判断で行えるようになった。それは他者の存在を考慮せず、自分の感情のおもむくままに行動する傾向を助長してしまう。」(『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版、2018年4月、151頁-153頁)

まさに今、山極博士が指摘している状況と思われれます。確かに、コロナ禍であってもインターネットの普及により大学の授業はオンラインによって可能となりました。しかし受講生同士が顔と顔を合わせ交流していたものが遮断されたのも事実です。大学に限らず人と人との接触が制限される日々の中で、互いに他者の存在感が希薄になったことは否めません。そして理不尽なことへの怒りや先が見えないことへの恐れなどから、たとえ見ず知らずの人であっても感情のままに相手を傷つけるのかもしれない。

一方、人間は言葉を通じて他者への思いやり・いたわりの心を伝えることができ、コロナ禍における医療従事者への敬意と感謝のメッセージなど良い一例です。生活を送る上で、他者を思い理性と感情のバランスを保つことはとても重要でしょう。まして今はコロナ禍による大きな不安や思い通りにならないことを多く抱える日常です。その不安や苦しみに宗教はどのように向き合うのでしょうか。

そこで次に仏教者の立場から考えてみたいと思います。平安時代から鎌倉時代にかけては疫病えきびょうと隣合わせの時代でありました。そのような時代を生き抜いた僧侶は何を語ったでしょう。

比叡山で修行され天台宗を開かれた伝教大師最澄(767-822)の有名な言葉に「己おのれを忘れて他を利するは慈悲の極きわみなり(忘己利他もうこりた)」とあります。仏の慈悲行に奮闘された大

師の言葉に仏道を基底とした他者を思う心が伝わってきます。(利他とは他者を利益し導くこと。親鸞聖人においては阿弥陀仏から衆生へのはたらき) その比叡山で若き 20 年間で過ごされた親鸞聖人 (1173-1263) は阿弥陀仏の救いを拠りどころとして 90 年の生涯をお念仏ひとすじに生き抜かれました。本当に悲しいことに私たち人間は時として他者を攻撃し、煩惱の海に浮き沈みしながら、欲に振り回される内面を有しています。その人間の内面を厳しい眼で直視しながら悲嘆し同時に「救いの慶び」を表現されたのが親鸞聖人です。

親鸞聖人が関東から京へ帰洛後、門弟に宛てたお手紙が残っています。その中で文応元年 (1260) 12 月 14 日、親鸞聖人 88 歳の時に関東の乗信房へ宛てた返書には次のようがあります。現代語訳は霊山勝海先生の解説によります。

なによりも、こぞ・ことし、老少男女おほくのひとびとの、しにあひて候らん
 ことこそ、あはれにさふらへ。たゞし無常のことはり、くはしく如來のとき
 をかせおはしましてさふらふうへは、おどろきおぼしめすべからずさふらふ。
 まづが身には、臨終の善悪をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひな
 ければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚癡無智のひとも、
 おはりもめでたく候へ。・・・以下略

(『末燈鈔』(6)『聖典全書』2巻・786頁-787頁)

なんといっても、去年から今年にかけて、老少男女多くの人びとが、あいついで亡くなりましたことは、悲しいことであります。しかしながら、人のいのちが無常である道理は、釈尊がくわしくお説きくださっているのでありますから、いまさら驚きになることはありません。まず私自身は、臨終のさまの善し悪しを問題にはいたしません。信心が決定している人は、疑いのころがありませんから、往生が約束された正定聚の位に住すのです。そうですから、愚かな人も無智の人も、臨終をめでたくまっとうすることができるのです。

(霊山勝海『親鸞聖人御消息』本願寺出版社、2006年、105頁-106頁)

無常の現実に向けた何とも淡々と厳しい言葉に聞こえますが、ありのまま知見することを示しておられます。

このお手紙を書かれた年の様子が鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』に記されています。6月1日の記事に(筆者が原文を書き下す)



疾風暴雨洪水。河辺ノ人屋ハ大底流失シ。山崩レ。人多ク盤石ノ為ニ圧死セラル。

とあり、甚大な豪雨災害があったことが分ります。また同年の6月12日の記事として

諸国ノ寺社大般若経転読ノ事。国土安穩疾病対治ノ為ニ。諸国ノ寺社ニ於テ。大般若最勝仁王経等ヲ転読セラル可キ也。

とあり、幕府が寺社に対して疫病を封じるために『大般若経』などを転読^{てんじやく}するよう命じています。

仏道^{ぶつどう}として、伝教大師最澄と親鸞聖人には共通する面がありますが（一乗^{いちじょう}：皆が成仏する教え）、他者を思う心のありようが異なっています。伝教大師は修行を極め他者へもはたらきかけ慈悲^{じひしん}心を投げかけようとされます。親鸞聖人は疫病などにより多くの命が失われることを大変悲しまれつつも、無常の世の中であって阿弥陀仏のはたらきによる自らの浄土往生の一点に返書の内容を絞られ、門弟方へ正しく真実の法が伝わるように精進^{しやうじん}されています。そのお姿に私は親鸞聖人が他者を思う心のありようを感じます。蓮如上人（1415-1499）は御同朋^{おんどうぼう}御同行^{おんどうぎやう}（共に同じく念仏する仲間）として親鸞聖人の教えを受け継がれ、人々が共に手を取り合い悲しみをも分かち合う生き方を示されました。

これから社会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた新しいステージに移行すると言われていています。私たちはコロナ社会をより良く生き抜く知恵を絞り行動をおこしていく必要があります。不安な今だからこそ、ありのままに知見し自らを問い直し他者を思う気持ちを大切にしていきたいと願います。

参考文献

新訂増補『國史大系吾妻鏡第四』（吉川弘文館、1975、741頁-742頁）



<第9回>

Stay House から Stay Home へ

菊川 一道 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員）



菊川氏

【著者紹介】

専門： 真宗学、近代仏教

著書・論文： 「東陽円月——非公式ハワイ開教僧たちの師匠」（嵩満也、吉永進一、碧海寿広編『日本仏教と西洋世界』法蔵館、2020年）「真宗私塾の研究」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』2016年）「お寺」と地域の公共性—なぜ、寺は潰れないのか？」（小林正弥、藤丸智雄編『本願寺白熱教室』法蔵館、2015年）

新型コロナウイルスの感染拡大により、亡くなられた方、大切な方を亡くされたすべての皆様に心より哀悼の意を表します。現在も多くの方がウィルスと闘っています。一日も早い快復と平穩の訪れを心から願ってやみません。

未知のウィルスによって、私たちの暮らしは一変しました。様々な不安やストレスを抱えて過ごしている方も少なくないでしょう。先日、とある報道番組で、今年度大学に入学

した新入生の多くが、一度もキャンパスを訪れることなく、自宅からオンラインでの学びを余儀なくされている実態が特集されていました。振り返ると、私も進学のために地元を離れて一人暮らしを始めた当初、とても心細かったことを思い出します。それでも無事に過ごすことが出来たのは、キャンパスで出会った友人たちの支えによるところが大きかったように思います。

しかし、今は感染拡大を避けるため、人との接触を極力避けるよう指導されます。こうした状況下では、新たな友人関係を構築することは難しく、特に新入生の皆さんが多大な不安やストレスを抱えておられることは想像に難くありません。



“ソーシャル・ディスタンス” (Social Distance) という言葉が世界の共通言語となり、すでに数カ月が経ちます。これほどまでに人と人との接触＝「つながり」がネガティブに捉えられたのは、過去にあまり例のないことです。本来「つながり」は、私たちが想像する以上に多くのメリットを有しています。政治学者のロバート・パットナムは、他者とのつながりを「社会関係資本」(Social Capital) と呼び、職場や学校、地域等における充実した人同士のつながりが、個々の健康や寿命、また周囲の犯罪発生率や政治参加率などと相関関係があることを明らかにしました(『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』2006年)。そこでは、豊かなつながりを持つ人ほど、愛他的・利他的な行動に結びつきやすいという事例も報告されています。つまり、他者との豊かな交流が、社会における人々の支え合い行動を活性化するというのです。

このように、人と人とのつながりは本来「資本」と呼ばれるほどに、私たちの生活を支える潤滑油のような役割を担っています。ディスタンスが要求される時代においても、オンラインなどを利用して、新たな形で人間関係の構築が不可欠であることは言うまでもありません。



もう一つ、最近とても気がかりな問題があります。それは、コロナウィルス感染者やその家族、周囲の人びとに対する差別や偏見です。ウィルスを完治させ、無事に退院した方がとあるインタビューの中で、「ウィルスよりも、人間の方がはるかに怖い」と述べられたことが、とても印象に残っています。その方は、自分が感染したことで、SNSなどで言われのない誹謗中傷を受け、大変に心を痛めたそうです。こうした事態が今各地で深刻な問題になっています。ウィルスとの闘いだけでも困難を強いられるなか、同じ人間からも攻撃を受けるとするのはとても悲しいことです。

浄土真宗の開祖・親鸞（1173-1263）の人間観を表す言葉に、「煩惱具足の凡夫」があります。「煩惱」とは、欲望や怒り、妬みなどの心に振り回される自己中心的な生き様を表します。また「凡夫」は、聖者とは正反対の凡庸な人を指します。「煩惱具足の凡夫」とは、誰か特定の人を指すのではなく、自分中心に物事を捉え、他者への迷惑を顧みない私たちのことなのです。

パンデミックという非日常において、自分ファーストで傍若無人に振舞い、フェイクニュースにそそのかされ、誤った情報を拡散する。それどころか、怒りに任せて他人を攻撃する。これらはまさに「煩惱具足の凡夫」の最も悪しき姿という他ありません。

人間は等しく不完全な存在です。煩惱に振り回される不完全な人間だという自己認識は、自身の考えや行動の正当性への懐疑を伴います。一方、「自分は正しい判断をしているのだろうか」という問いを失うと、そこには傲慢が生じます。だからこそ、思考停止することなく多くの情報や他者の多様な声に真摯に耳を傾け、安易な行動を慎む態度が求められます。



コロナウィルスを食べ止める確実な方法が無い中において、「ステイホーム」(Stay Home)の風潮は今後もしばらく続くでしょう。しかし、その実態の多くは「ステイハウス」(Stay House)なのかもしれません。ただ自宅に止まり、人との接触を避ける。こうした状況は、ステイ「ハウス」と言わざるを得ません。英語の「ホーム」には、家や家庭という意味の他に、「居場所」や「安心できる拠りどころ」という意味があります。信頼できる情報やデータに基づいて、自他共に安心を得られる「ホーム」を作っていくことも、大切なステイホームの一面ではないでしょうか。

最後に宮沢賢治（1896-1933）の言葉を紹介します。

世界がぜんたい
幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない。

（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』1926年）

誰かが傷ついている間は、自己の幸福は実現しない。ストレスの多い時期だからこそ、他者と共に生きる世界について、改めて皆さんと一緒に考えたいと思います。



<第10回>

大きなつながり

井上 善幸 氏 (龍谷大学 教授)



井上氏

【著者紹介】

専 門： 真宗学

著書・論文： 『問答と論争の仏教—宗教的コミュニケーションの射程—』（共編者マルティン・レップ、法蔵館、2011年）

「もし、あなたが詩人であるならば、この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいることを、はっきりと見るでしょう。」

この言葉は私が授業でよく紹介しているベトナム人仏教僧侶、ティク・ナット・ハン師の言葉です。いかがでしょう。雲が見えますか？たいていの人はず見えないと思います。というより、何を言っているのだろう？という反応がほとんどでしょう。

「この一枚の紙」これは何でもかまいません。あなたの身の回りにある紙を手にとってみてください。メモ帳でもノートでも、チラシでもティッシュでも。そこに雲は見えますか？（初めてこの言葉を聞いたとき、私に雲は見えませんでした。）

ところで、目の前の紙は、ある日あるとき突然に、紙としてこの世に出現したのでしょ

うか？いえいえ、紙には原料があります。では、紙の原料は何でしょう。それはパルプです。ではそのパルプの原料は？そう。樹木です。樹木があつてこそ、今私の目の前に一枚の紙があるのです。

ではこの樹木、ある日あるとき突然に樹木としてこの世界に出現したのでしょうか？樹木が育つには日の光が必要です。そして、十分な水分をもたらす雨も必要ですね。では、雨を降らすのは？そうです。雲です。空に浮かぶ雲があつてこそ、今、私の目の前に一枚の紙があるのです。

どうでしょう。手元の紙と雲とのつながりが見えてきましたか？このつながりが見えてくると、降りそそぐ陽の光、太陽も見えてきます。森を育む自然の営みが見えてきます。

ところで、森の樹木は、ある日突然紙になるわけではありません。そこには、林業に携わる人や製紙工場で働く人たちが関わっています。では、木を伐採する人や製紙工場で働く人は、ある日あるとき突然に、この世に従業員として登場してきたのでしょうか。そうではありませんね。その人が育ってきた家庭や友人、知人、職場の人々など、いろいろな出会いやつながりがあつてこそ、この瞬間、この瞬間の今があるのです。そして、このような関係性は、その人が育んでいる家庭や人間関係にも同様に見出せます。

このように想像を広げていくと、一枚の紙は世界全体、さらには宇宙全体にまでつながっていきます。そして、この発想は目の前の紙に限られるのではなく、ペンも、テーブルも、この私自身にも、そして、私を取り巻くすべての人、モノ、コトにも当てはまります。今この瞬間が大きなつながりの中で、さまざまなめぐりあいが織りなす結び目として起こっているという気付きからは、新鮮な驚きと新しい視点が与えられます。そして想像力はたらしき、さらなる気付きがもたらされます。

ところでこの気付きは、現実に実感できるものだけでなく、想像力によって構想されたものにも及びます。そして、この実感や想像力は、時に厄介なものでもあります。というのも、私たちはつい自分の都合や価値観に基づいて「大きなつながり」を捉えてしまい、偏った見方や誤った先入観を懐いてしまうからです。

現在、先の見えない新型コロナウイルスの流行が世界を覆っています。この不安の中で、私たちはお互いを気遣い、思いやりをもって接する姿に、いつも以上に気付かされます。でも、その一方で、悲しいことですが心の余裕がなくなったせいも、いつのまにか他者に対して攻撃的になったり、傷付けたり、あるいは傷付けられたりすることがあります。想像力による気付きは、お互いを思いやり支え合っていくさまざまなすがたや場面を描き出すこともあれば、好ましくない状況の原因を勝手に想像し、攻撃対象として特定しようと

する妄想力としてもはたります。

仏教に限らず、長い歴史をくぐり抜けてきた宗教にはレンズのようなはたらきがあります。ふだん当たり前だと思っているこの日常世界、そして自分自身の生き方について、一歩引き下がってパノラマで見渡したり、高い視点から俯瞰で捉えたり、あるいは1点にフォーカスしてクローズアップしてみたり。どこにピントを合わせるかによって見えてくるものも違います。そのレンズを通して見えてくるのは、つながり合い支え合って生きることの素晴らしさであったり、あるいはその逆にお互いに排除し疎外し合う醜さであったりします。どちらも私たちが抱える現実ですが、慈しみ育み合う関係を究極にまで推し進めたものを悟りの智慧と慈悲のはたらきであるとするならば、その反対に自分の都合を最優先させてしまう生き方は迷いであると言えるでしょう。

龍谷大学の建学の精神にはこのようにあります。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

私見ですが、仏教は、現在私たちが直面しているコロナ危機のような緊急事態に対して有益な解決策を直接提示するタイプの宗教ではありません。その意味では、仏教からの発信は、危機回避にはほとんど役に立たないと言っていいでしょう。でも、仏教には危機回避の処方箋とは異なるはたらきがあります。それは言わば、対症療法ではなく体質改善のようなものです。危険要素を排除する技術としての知恵ではなく、場合によっては共存していくしなやかでしたたかな知恵であり、痛みを共有していくという人類の歴史が培ってきた知恵につながるものでしょう。長丁場になりそうですが、体質改善のチェックのためにも、仏教という鑑^{かがみ}に向きあう日々を送りたいと思います。

参考文献

ティク・ナット・ハン、棚橋一晃訳『仏の教えビーイング・ピースほほえみが人を生かす』中公文庫、1999年、pp.68-72)